

(3) マレーシア班 日程

月 日	曜日	日 程
8月24日	木	10:00 成田発 (JL721) 15:50 クアラルンプール着 (KL)
25日	金	09:30 JICA事務所 10:30 マラヤ大学日本語研究センター視察 13:30 KL → 18:30 イポー 19:00 専門家、協力隊員と懇談
26日	土	08:00 相模インダストリーズ視察 10:30 家禽病研究訓練センター視察 13:00 プロジェクト関係者と昼食会 15:00 イポー → 17:00 ペナン
27日	日	休日 (市内見学)
28日	月	09:00 ペナン → 12:00 テロインタン 12:30 FELCRA スプランペラ稲作プロジェクト協力隊員視察 15:30 テロインタン → 19:30 KL
29日	火	10:00 林産研究所視察 14:30 職業訓練指導員・上級技能訓練センター (CIAS) 視察
30日	水	10:00 クアラルンプール日本人学校視察 クアラルンプール市内視察 22:45 KL発 (JL722)
31日	木	06:25 成田着

氏名 工藤康暢
所属学校 青森県立八戸北高等学校
担当教科 英語

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) JICAによる援助の実際をその現場で見る。
- (2) マレーシア国について資料等からはうかがい知れない実際の現地の姿を見、そこに住む人々の生活に触れる。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

様々に行なわれているプロジェクトが、それぞれの分野でのマレーシアへの技術移転を中心にしたものであり、いずれ彼らが独り立ちしていくためのものであるということがよくわかったことである。

施設、設備への金銭的な援助もさることながら、実際に現地で日々これに携わっている方々には心から敬意を表したい。くれぐれも健康に留意されてこれからもご活躍されんことを願いたい。

特に、今回の訪問先には青森県、あるいは八戸にご縁がある方が何人かいらっしまったことが誇らしくもあり大きな刺激となった。

(2) 気になったこと

このマレーシアに限ったことではないのであろうが、やはり受け入れ側の意識のずれのようなものがあり、現地での専門家や協力隊員たちが非常に意欲的、献身的に活動しているのがわかるだけに歯痒さを感じざるをえない。

また、現在のルック・イースト政策に基づいて、例えばマラヤ大学での日本語教育、そして日本への留学が行なわれているわけだが、一方では従来からのイギリス志向というものがいまだに根強く残っており、日本帰りの留学生たちの活動の場が確保されているとは言えない点など、マレーシア内部でのこのプロジェクトの位置付けが確立していないようで残念である。

イギリスによるこの国の統治は時間的にも長いものであったのだろうが、そのイギリスというものが彼らの文化にまで影響を与えているようだ。そういった環境での日本の援助が今以

上に心の通い合ったものとして彼らにより広くそして深く受け入れられるよう JICA をはじめとした最前線の方々の将来に向けた継続的なご努力をお願いしたいものである。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

マレーシア・アセアン家禽病研究訓練計画（イポー市）

（理由）日本による援助が物、人両面において充実している。また、このプロジェクトが対マレーシア一国のみならず、アセアン各国へも技術移転が行なわれるその地域における中核的なものであるという点で、東南アジアの中のマレーシアの位置付け、役割をよく反映したものだと考えられるので。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回のこの体験を様々な機会をとらえて発表していくと共に、今回手に入れたいろいろな資料を整理し、逐次授業に取り入れていきたい。また、協力隊員の体験談などを英訳して授業に活用することも考えている。

また、英語の教員としては、やはり生徒が自分の考えを英語で表現できる力を彼らにつけさせるように努力したい。

従来、世界中どこにでも日本の「モノ」は溢れているがそれを作る日本人の「カオヤココロ」が見えないということがよく言われた。もっと日本人の姿、思想、文化等が伝えられるよう生徒と共に努力していきたい。

5. 所感および感想

（1）研修時期および期間

良いと思うが、期間については日程との関連もあり、もう少し長くても良かったのではないだろうか。

（2）研修日程および訪問先

マレーシア国内の移動がバスによるものだったこともあり、少々きつい感じもあった。特に昨今の環境問題との関連もあり林産研究プロジェクトでもう少し時間が取れたらという感がある。また、これは JICA 主催の研修なので趣旨が違うのかもしれないが、現地の学校（マレーシア人がマレーシア人のために教育している）現場も訪問先に盛り込んでいただけ

たらと思う。

(3) その他

今回同行して下さったJICAの中川さん、瀬合さんをはじめとして現地のスタッフの方々、そして各先生方、ひいてはトラベルエージェントやガイド、ドライバーにいたるまで実にたくさんの方々のお世話により、今回非常に有り難い経験をさせていただきました。感謝の気持で一杯です。

氏 名 増 淵 夫美康
所属学校 栃木県立真岡農業高等学校
担当教科 農業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) 農業生産体制全般にわたっての現況
- (2) 日本の経済協力の状況
- (3) 国の風俗、文化、教育についての内容

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

視察する所に日本の精密機械が援助され、有効利用されている点と、JICA職員をはじめ、青年海外協力隊の熱心な活動に感銘を受けました。

(2) 気になったこと

- ア. 貧富の差が大きいように感じられ、福祉の面で疑問をもちました。
- イ. 技術援助が十分であるかどうか疑問をもちました。
- ウ. 人材的援助の充実をもう少し図るべきだと思われる。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

国際教育研究協議会の行事の中に、生徒を対象とした国際交流研修会と、顧問を対象とした国際理解研究会があるので、この機会に我が国の国際協力をより具体的に紹介するとよいと思います。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

校内においては、授業は基よりクラブ活動や学校祭等で、視察国の現況と国際協力（JICAを中心とした）を紹介したいと考えています。また、国際教育研究協議会の各種行事の中で機会をみて報告とPRをしたいと思っています。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

2学期の準備がありますので、時期はもう少し早め（8/18頃から）にしてもらいたと思います。

(2) 研修日程および訪問先

全体的にはよかったと思いましたが、訪問先にてその国の教育関係者ともっと多く話す機会や、授業風景を直接視察出来ればよかったと思いました。

(3) その他全般的な所感

JICAの綿密な計画により、全員事故もトラブルもなく、無事日程を終了できたことに対して深く感謝しています。また、教育現場にて、より一層の国際教育を重視していかなければならないと思いました。

氏名 新井敏夫
所属学校 埼玉県立熊谷農業高校
担当教科 農業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

プロジェクト計画の実態
協力隊員との懇談会

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

国際協力を推進安定化をはかるために第一線で活躍しているJICA職員をはじめ、技術協力や普及活動している専門家や協力隊員の方々の地道な努力の積み重ねこそが、人と人との相互理解を生み出し、途上国の国民生活の向上につながり、ひいては国家間の強い信頼関係ができるものと思う。

(2) 気になったこと

ア. 全体を通して

各プロジェクトにおける専門家が帰国した場合、技術の向上と安定化が心配される。プロジェクトの終了後の定期的な相互交流は心配ではないかと思う。

イ. 家禽病センター

このセンターの役割はマレーシアはもとより、アセアン諸国の期待するところは大変大きい。今の段階では、センターでの活動を軌道に乗せることが急務であるが、研究成果が具体的に、一般養鶏農家へ普及してこそ、本当に役割を果たすことができるものと思う。日本と国情が異なるので、どのような仕組みで普及していくのか気になるところである。

ウ. スプランベラ稲作プロジェクト

協力隊員の地道な努力により、生産量が飛躍的に増大したことは高く評価すべきである。しかし、ジャングルを切り開き、りっぱな耕地となった水田も、生産至上主義が生み出す化学肥料農業依存が土壌環境に及ぼす影響は大きいと思う。試験研究機関との連携を密にし、バランスのとれた生産技術を確立し、途上国の人づくりを支援することが必要であると思う。

エ、マレーシア林産研究計画

半島マレーシアにおける林産計画は、計画的に植林（ゴム、パームオイル）され、大きな社会問題となっていないが、東マレーシア（旧ボルネオ）における環境破壊は地球規模の問題となっている。半島マレーシアの研究成果を、東マレーシアにおいて活用できないものなのだろうか。

3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

- (1) 研修員受入れ（特に青年招へい）の紹介
- (2) マレーシアアセアン家禽病研修訓練センター
- (3) マレーシア職業訓練指導、上級技能者養成センター
- (4) マレーシア林産研究協力計画

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) マレーシアにおける J I C A ベース技術協力の概況
- (2) 写真、スライド利用による各訪問先の紹介
- (3) 環境保全を考慮させた栽培技術（農業）指導

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

帰国の翌日が始業式であったので、もう少しゆとりが欲しかった。

期間は無理のない範囲内であったと思う。

(2) 研修日程および訪問先

日程や訪問先は8日間の研修範囲では極めて良かった。可能であったならば東マレーシアも訪問したかった。

(3) その他全般的な所感

この度は、限られた期間での国際協力の実態を学習する機会を与えていただき心より感謝申し上げます。中川様、瀬合様をはじめ J I C A 職員の皆様の心暖まる準備や協力があればこそ意義ある研修ができたものと思います。本当にありがとうございました。

氏 名 足 立 欣 一
所属学校 千葉県立船橋二和高等学校
担当教科 社会科

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

マレーシアの、日本に対する政治的、経済的期待感。
「プミプトラ政策」に見られる、人種間の対立問題。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

千葉県高等学校国際教育研究会に所属してから、JICA、青年海外協力隊等の活躍を知るようになった。今回、この研修に参加して海外の第一線で力を尽くされている日本人に接し国際協力、国際理解の重要性を益々感じた。

(2) 気になったこと

協力プロジェクトのうち協力期限の迫っているプロジェクトの今後の方向性。
無償供与備品等にJICAマークのシールが数多く張られていたが、援助を受ける側の感情を配慮すると、ちょっと気になった。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

CIASTプロジェクト

国際協力での物的援助や供与の話題は、マスコミ等でもよく見聞きするが、【人造り】の観点での協力は、あまり知られていない部分ではないかと思う。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

「地理」という最も現実的な科目を担当しているため、新学期から早速授業の導入、展開に役立っている。

具体的には、東南アジア地誌、モノカルチャー経済の問題点、マレーシアにおける民族、宗教の問題、華人（華僑）の経済的支配とプミプトラ政策の問題等、視察現場のスライド、資料を使

って話題の提供をしていきたい。

青年海外協力隊についても興味を持っている生徒も多く、現場での様子等も話してみたいと思う。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

日程的に8月下旬もやむを得ないと思うが、マラヤ大学、クアラルンプール日本人学校等の教育現場の視察には休業中でもあり、残念であった。

(2) 研修日程および訪問先

マレーシア国内の行程でバスを利用したのは、現地の生活を知る上で非常に良かったと思う。プロジェクトの見学も数が多く興味を引いた。移動の際、ゴム農園は見学できたが、あわせてパーム油、ココヤシ等の農園にも立ち寄れると尚、良かったと思う。

(3) その他全般的な所感

授業の中で青年海外協力隊の存在を話すると質問に来る生徒も増えてきている。今までその存在を知らなかった者にとっては、興味深いのではないかと思う。

広範囲なPR活動をしていきたいと思う。国際化への取組を踏まえて、今後とも生徒に興味を喚起していきたいと思う。

氏名 高崎 義一
所属学校 石川県立七尾高等学校
担当教科 英語

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

日本とマレーシアの国民性や生活様式などの違いに大変興味があったし、それを理解することが国際理解（教育）の重要な部分でもあると考えているので、そういうことを視点にして、日本の海外協力というものを視察する。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

国際交流ということが非常に大切になってきている状況の中で、日本を離れて専門技術を教え、身を持って国際交流をしておいでの方々姿を見て、口先だけでは駄目であり、せめて、将来ある生徒たちには十分に国際交流の大切さを教え、少しでも多くの若者が国際交流（国際協力）に関心を持ってくれるよう指導したいという気持ちが起きたこと。

(2) 気になったこと

マレーシアに対する経済援助の額は大変なものだということは良く理解できたが、マレーシアに派遣されている人たちが現地の機関ではどのような位置づけにあり、どれだけ深入りできるのかという点が各々の派遣者によって大きな差があるようだが、実態がよく理解できなかった。

ヨーロッパなどを旅行しても、生水を飲むなどと良く言われたが、マレーシアでは特に生水は危険であるような気がした。上水道の根本的な改良などにより、いくらかでも改善するような協力はできないのだろうか。今後とも、国際交流が盛んになり、大勢の人たちが、マレーシアを訪れることになると思われるので。

現地の運営費不足、及び事業拡張の割には事業団の職員数が増えていないことのために、比較的早めに日本人専門家がなくなった後のそのプロジェクトの指導管理に不安が残るという点。

多民族国家であるということに対してどのような対応をしているのか、あるいはそういうことは考慮する必要はないのかという点。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

世間一般の人たちは、日本がマレーシア全土の森林を乱伐しているかのごとき印象を抱いているが、実際は、FRIM等により、半島マレーシアの森林は計画的に管理されていること。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

写してきた写真をもとにしてスライドを作成し、研修を通じて知り得たことに本などで肉付けをし、マレーシア及びマレーシアへの協力の様子について生徒に紹介する。但し、本校は進学校なので、あまり多くの時間を割けないのが残念ですが。

また、出来れば、石川県高等学校国際教育研究協議会の研修会などを利用して、上記のことが実施出来れば良いと考えています。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

いろいろな事情があって今回のように8月24日から8月31日という日程に決定したのであるが、高校の教員という面から考えれば、7月下旬か8月初旬に設定するか、あるいはせめて夏休み終了（石川県の場合は8月31日）の2、3日前に帰国できる方が良いと思います。そうすれば、余裕を持って旅行のまとめもできるし、休養を取ってから新学期に臨めるのではないかと思います。

(2) 研修日程および訪問先

各種の協力及びプロジェクトを視察するためには仕方のないことなのかも知れませんが、バスによる移動時間が多すぎたのではないかと思います。

上の意見とは相入れないのですが、半島マレーシアだけではなく、開発の遅れているサバ・サラワクの方へも行ければ、比較対照もできて良かったのではないかと思います。

マレーシアも、日本と同様に海に囲まれた国なので、海洋関係のものも見たいという気がしました。

(3) その他全般的な所感

寄り集まりのグループなので、出来れば事前説明会の時点でグループの中心となる人を決めて、説明会の冒頭の部分にその人の挨拶を入れるなどして、グループとしてのまとまりをも

っと早い時期に持った方がよいと思います。これは、われわれの方でちゃんとやるべきことなのかも知れませんが、なかなか難しいような気もするので、事業団の方で音頭をとって頂いた方がよいのではないかと思います。

大きな収穫だと自分で勝手に思っていることは、新聞などで「マレーシア」とか「クアラルンプール」等の文字が目にはいると、必ずその記事に目を通すようになったという点です。

氏 名 高 橋 史 雄
所属学校 名古屋市立名東高等学校
担当教科 国語

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

孤立して生きるわけにはいかない国際社会において、国民の「国際化」が必要であるのは別段今に始まったことではない。にもかかわらず、近年ますますその必要性が叫ばれるのは、日本の国際社会における地位が、わが国の歴史上かつてなかったほど格段に向上したためであろう。他の国々を理解することは勿論のことだが、それ以上に他の国々に我々の国とわれわれ自身がどう理解されるかがきわめて肝要な問題となってきたのである。

とりわけ発展途上国、特にアジアの発展途上国とは例えば次の諸点において、他の地域とは異なった関わりの深さがある。

- (1) 過去の歴史上の「不幸な」関係があること。
- (2) 現在の経済関係もまた、新たな「不幸な」関係になる可能性をもつこと。
 - ア. 日本の経済進出が不当にまた過度に圧迫を加える可能性。
 - イ. 歴史上の日本に対する不信感の上に、新たにまた不信感を加える可能性。

ところが、日本の青年たちにとって「国際化」といえば先ず英語や仏語を身に付けて欧米諸国へ出掛けていくことを意味し、アジア諸国は経済的には必要だが、文化的社会的には「見えない」国々であるという構造が、明治維新以来連綿として続いている。日本の国際的地位が向上すればするほど、精神的なものを求める意味でのアジア離れはますます募る。取り分け、若い人達にそれは顕著な傾向である。

若い人達の目をアジアに向けさせるにはどうすればよいか。

—— アジアを意識に置く時、私はいつもこのことを思う。しかし、そのためには先ず自身が良く知り、良く理解しなければなるまい。大きく言えば、そんなことを考えながら出掛けた。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

各プロジェクトの現場で活躍しておいで JICA 職員の方々、専門家の先生方、協力隊員の皆さんがそれぞれに、現地のマレイシア側の職員の人達と、まことに親密な協力関係をつくっていらっしやったのがかなりより印象に残った。施設や機材、研修の機会などを用意することも勿論大切だし、その点でも並々ならぬ協力がなされていることは、数字のうえでも現

場の状況でも明らかだったが、協力の現場でなにより大切なのは人と人との関係である。援助・協力する側の人達が、専門の知識と技術において真にエキスパートであることが第一の条件であろうが、さらに誠意と熱意という第二の条件が加われば理想的だと言える。今回の研修では、双方の職員のみなさんと懇談する機会を設定して頂いたが、そういう場での和やかで温かい交流の印象は強く、今後大いに参考になるものと思う。

(2) 気になったこと

上述のことと裏腹なのだが、私たちが出会ったマレーシア側の職員の皆さんは主として政府や各機関の上層に位置する方達であり、生産その他の活動の現場の人達や、現場から来た研修生と直接懇談して話を聞く機会はなかった。そういう、言わば末端の部分で援助・協力がどう受け取られ、どのような実質的効果を得ているのかが、よく分からなかった。

例えば、イポーの家禽病研究センターについて言えば、病気の実態の研究もさることながら、生産現場で実際に必要なのは防疫と駆除の制度、システムの確立およびワクチンや薬の生産と供給の態勢づくりとその実施であろう。いまの形ではそこまで手が届かない。それは援助・協力の限界だろうか。

また例えば、稲作指導の現場では、工業技術の指導などは根本的に異なる援助の難しさを感じた。現地の生産者の伝統と経験に基づく知識や技術に対して、気候や風土を始めとして、生産状況のほとんど全ての面で異質の国からの指導員の協力が、果たしてどの程度受け入れられるものだろうか。野菜など換金作物の栽培を教えることにしても、流通機構を把握する問題が早速生じていた。しかもそれが殆ど把握できないとのことだった。つまり、単に技術や知識だけ持ち込んでもどうにもならない問題が潜んでいるわけだ。

また、この稲作指導のプロジェクト・チームの中に若い協力隊員の方達がいた。都市文明の生活から最も遠いところで、旺盛な熱意と誠意とをもって潑刺として頑張っておられたが、知識も経験も豊かとは言えない若さであるうえに、前述の困難も加わって、今回の研修の中で最も「気になる」プロジェクトだった。青年たちはマレー語を上手に繰り、国際交流の一番の基本である意志疎通の手段を確実にものにしていて、そういう若い人達であるからこそ、「草の根」の協力が可能になるわけではあるが、しかしそれが実際的な実りを得るに至る道は実に厳しく遠いと感じられた。

林産研究所で伺った話では、その方面の援助では西ドイツが最も幅も広く息が長いとのことだった。日本のプロジェクトは、間もなく予定を完了して収束しようとしていた。わが国の

援助は、この長期性と計画性において見直されるべき点があるように感じた。

3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回見学したプロジェクトの中でもっとも着実な手応えを感じたのは、シャーアラムの職業訓練指導員・上級技能訓練センター（CIAST）だった。工業技術は目下の現場のニーズも高く、指導・訓練の成果がまさに眼前にある。各モジュールの開発も、出来るかぎりマレーシアとアセアン諸国の実情に合わせる努力がなされていた。「1、2年で、私たちが持っている技術・知識は吸い取られます。日進月歩の世界ですから、日本に帰ってまた再充演してくる必要があるでしょう」と、ある専門指導員の方がおっしゃっていた。要員だけでなく施設・設備も絶えず更新して行く必要があるだろう。取り合えず、二年の延長がなされることになった由だが、態勢を更新しつつ息の長い協力が望まれるところだ。

また、途上国への援助・協力のあり方として、各分野の活動の末端か、中間的な節目にあたる部分へか、上層の部分へか、という問題があるが、日本でいえば職業訓練所の教官たちを指導、訓練するという、このセンターは、指導の効率という点で最も理想的なのではないだろうか。この人達を日本国内へ招いて研修させるというかたちが長期的に充実すれば、さらに着実なものとなるだろう。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

将来、海外へ出て仕事をしたいと考えている生徒は極めて多い。しかし、その殆どは非常に漠然としたかたちで夢想しているにすぎない。これに何とか指針を与えようとする私たちにしても、事情は似たりよったりである。どのような仕事や活動の場があるのかを具体的に示すためには、今回のような実地の見学が必要だ。この度の見聞を生かして、各活動現場の実態を資料展示などで示すとともに、文科であれ、理科であれ、先ずそれぞれの分野のエキスパートになること、これが海外への道であるし、実際に出掛けて行った場合に自他ともに納得できる仕事をするための要件であることを教えたい。

バベルの塔ではないが、国際協力の最大の壁のひとつは言葉の障壁である。マレーシアという多民族国家における言語の状況を教えることも、生徒たちには刺激になるだろう。マレー人の英語、インド人の英語、中国人の英語、そしてわれわれ日本人の英語があった。週に五時間も六時間も習い続けてうんざりもしている英語が、とりあえずはそのように多様な民族間の共通語として働

くありさまは、なかなか生徒たちに伝える価値のあるものだったと思う。

また、その多民族がそれぞれの文化を担いながらみごとに共存している有り様も国際協調を教えるのに恰好の材料だ。

以上の事柄につき JICA の資料も活用させて頂きながら、図書館での資料展示などを実現していきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

時期は諸々の事情もあろうし、云々すべきことでもあるまいと思うが、期間については出来れば二週間は欲しい。理由は次の項も関係する。

(2) 研修日程および訪問先

7泊8日では日程が詰まり過ぎる。マレーシアや、アセアン諸国からの研修生に直接話を聞く機会や、農村の生活を直かに見学するような企画があれば、研修は更に肉付けがなされることになるだろう。

(3) その他全般的な所感

やや短い日程に過密なスケジュールではあったが、いろいろ見せていただいたおかげで、援助・協力というもののアウトラインがなんとか掴めたように思う。

それらの、本来の研修目的にかなう見聞の他に、いわば副産物的に見ることのできたものもある。相模ゴムの工場見学にしても、合弁企業というものの実際例を初めて見学できたし、現地の生活に根を下ろしかかっている工場長の話には、政府間の協力とはまた趣の異なった協力の実態を伺うことができ大変意義が深かった。

また日本人学校という特殊な空間を見せて頂いたことも、協力・協調とはまったく異質の、いかにもわが日本らしい異様な現地滞在の形式として反面教師的に意義深かった。私の勤務する学校では毎年数多くの帰国子女を受け入れるが、その中のある生徒たちの全く予想外に貧弱な「国際感覚」の困って来るところがよく理解できた。

さらに私個人の問題としては、アジアの「深南部」の華僑の暮らしに触れることが出来たことが貴重な体験となった。

私が働きかけをなし得る範囲は狭く浅いが、概略以上のことを今後の仕事の上には是非生かしていきたい。

最後になってしまいましたが、こうした機会をお与え下さったことに深く感謝いたしております。本当に有り難うございました。

氏 名 田 中 恵 次
所属学校 滋賀県立東大津高等学校
担当教科 英語

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

マレーシアにおける国際協力事業団（JICA）が実施しているプロジェクトの内容と成果について

国際協力事業団は平成元年度事業規模として年間2,741億円の資金を種々の技術協力費に約1,200億円、無償資金協力（種々の研究訓練所、宿舍の建設費等）に約1,540億円を予算化して、主として発展途上国の工業、農水産業、建設土木、運輸通信業等の施設改善、技術向上や日本語学校、日本語研究センターの経営、援助のため48カ所の在外事務所を通じてこれら種々の分野の短期、長期の専門家、海外協力隊員の派遣、研究施設の建設、備品、機械器具の調達、各プロジェクトの調査等と多様な活動を行っていることを初めて知り驚嘆している。

実際に研修したマレーシアにおけるセランゴール州シャムアラムの職業訓練指導員・上級技能訓練センター、ケボンの林産研究所、歳月は浅いがイポーの家禽病研究訓練センター等において、JICAが農林水産、労働省等と連携をもって、施設設備を整え、派遣された専門家、協力隊員が現地マレーシアの研修員に熱心に我慢強く指導されている姿や、最近の機器を用いて防疫、栽培、工具や冶金の製作、鋳造、自動車の故障分析、コンピューターの操作など地道に働いている現地研修員の姿を見学して、これらプロジェクトが大きな成果をあげ国際協力、途上国の発展に非常に貢献していることを認識せずにはいられませんでした。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア. JICAが政府開発援助資金（ODA）を開発途上国の発展と国民の生活水準向上のために年次計画に従い種々のプロジェクトを実施してかなりの成果を挙げていることや、米年で日本は世界一の援助大国になり、国際社会における日本の貢献は大きく、誇りを持つと同時に今後これらの途上国に対する責任も重大であることや、これらの国々への援助が世界平和のために如何に大切であるか等を高校生に伝え国際理解、協力の教育の一助にしたい。

イ、開発途上国の援助と言えば、日本は過去は現地の事情を深く調べず物質的援助が多く、その資金が十分に生かされなかったが、近年はJICAが現地の関係機関と連携をもって実状調査のうえ施設、設備を供与し、専門家、協力隊員を派遣して現地の各分野の研修員の才能開発と技能の向上を計り、より多くの国民が自立できるよう援助、協力していることも大いに参考になった。

(2) 気になったこと

ア、マレーシアは農業はかなり発達している国だと思っていたがテロインタンのスプランベラ稲作プロジェクトを見学して専門家や協力隊員との懇談から、野菜や稲作は苗を植えてから根気よく世話をしなければならぬ点で避ける傾向があり、農地所有者でも世話のあまりかからない椰子やオイルパーム、マンゴ、ゴム等の栽培が多く、主たる産業の一つである米の自給率は約80%で、約20%は他国から輸入していることを知り意外に感じた。

政府も対策として品種の良い野菜や、米の増産のため政府管理の農地を15年間JICAのプロジェクトをふまえて働けば4.2haの農地と家を無償供与する条件で農業従事者を集めているがまだ充足していないとのことである。15年もかかるためと、働かなくても生きてゆけるため(生きてゆけるキリギリスと言っている)労働意欲があまりなく、色々教えようとしても即座に習おうとしないことが多いので派遣された専門家や協力隊員が身を挺して現地のマネージャーを中心に訓練指導しているが鼠、うんか、亀虫等の被害も多く、現地の生活習慣、職業観等の改善を少しずつ行いながら長期的な取り組みで進めなくてはならず、今後の動向を考えると気になることの一つである。

イ、8月29日、ケボンにある林産研究所を訪問した際、ジャーフィンさんに私が質問したことが、最近我国で行われている地球環境会議でまさいに行われている熱帯林保存であり、テレビでは東マレーシアの原木の伐採を放映していた。ジャーフィン氏によれば、半島マレーシア(西マレーシア)では熱帯林の成長度を考慮した上で各々の地域で計画的に伐採を行い、全て加工材で輸出するよう行政、管理しているが東マレーシアのサバ、サラワク州は行政上難しく、伐採も多く、原木で輸出していて林産加工、林産研究の分野も林産行政と同じく半島マレーシアとは事情が異なると話されていたが、来年3月でこのプロジェクトへの協力が打ち切りとなることは、東マレーシアの事情も考えると気がかりな点でもある。おりしも地球環境会議では熱帯林保存の重要性を世界に訴え、先進国、途上国が協力しなければ地球環境問題は解決しないとして、資金、技術の途上国へ

の円滑な移転が必要であると宣言している点から、半島マレーシアにおける林業のさらなる発展と東マレーシアに対する林業改善のためにも協力期間の再延長が必要と思われる。

- ウ. 日本から派遣されている専門家や協力隊員が苦労するのは、やはり言語であると言える。実際に理科、数学、機械力学、電気理論等難しい問題をより具体的に説明する場合とか、何か複雑な事情で研修を避ける現地の研修員の気持を理解し、ほぐしてやるような場合などに言語の壁にぶつかってしまう。また彼らの英語を理解出来ない時、軽蔑することも時々あり悔しく思うと話された。マレーシアでは英語は公用語として小学校から習っているので英語でコミュニケーション出来る。世界一の援助国になろうとしている日本であれば、国際語として英語を小学校一年から指導し、高校卒業時で一般的な会話や、大学卒業時には各々専門分野の事柄も英語で話せるようにすべきであろう。そうなれば不足している専門家や協力隊員の派遣も増加しやすく、途上国の人作り、国際交流、協力の進展につながると思われる。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

職業訓練指導員・上級技能訓練センター（CIAST）

〔理由〕

マレーシアの貧困の根絶とより豊かな社会の再編成の実現を目指した技能労働者の養成のため

- (1) 近代的な職業技能の向上 (2) 指導、監督技法の向上 を目指している。

鑄造、機械、電子、監督技法等において、現地研修者がJICAを通して供与された機械、器具、コンピューター等を使って、派遣された専門家や、協力隊員の熱心な根気よい指導によりかなり高度な物を作ったり、データを出していた。さらに現地指導員がいくつかの分野で研修者に指導している姿が目前に明確に見学出来たから。

4. 所感及び意見

(1) 研修時期及び期間

研修時期としては、もう4日程早めて欲しい。2学期早々には実力テストや校務分掌によっては2学期の準備等が多いこともある。しかし期間としては研修する所、懇談する所、市内見学する所と行程の時間を考えると合理的に組まれ、設定されていたと思う。

(2) 研修日程及び訪問先

第3日の相模インダストリーは現地の社員の真面目な勤務ぶりが実際に見られ良かったとは思いますが、研修報告するためにはJICAが関わる漁業か油脂化学など適切なプロジェクトにしてほしいと思った。さらにマレーシアに来ているのだからもう1日、2日延ばしてシンガポールでの適当なプロジェクトを見学させてほしいものと思った。

(3) その他の全般的な所感

ア. 私は英語の教員であるため幸い色々な人々と情報交換がもてた。特に、イポーの家禽病訓練センター所長のガン氏や研究員のワン氏、林産研究所のJaafin氏等には研究所の研究内容や成果など親切に語ってくれた。またフェラデルホテル内のみやげ物店のTreneさんは、良心的にみやげ物について助言され日本人の国民性や特徴等を適切に把握されていたのが印象に残っている。市内見学をした所や乗車バスの一時休憩した所でも、楽しく有意義に国際交流が出来たことを感謝しています。

イ. クアラルンプールやイポー、ペナン島の市内や郊外では非常に立派な邸宅に住み、素晴らしい絹の衣裳を纏っている人と対照的に15坪内外の広さで屋根が古いトタンや椰子の葉等で葺かれ、壁と言っても葦等で囲った簡単な木造の家に住み、垢汚れた粗末な衣裳を纏った痩せた人が多いのに驚いた。国内の行政面、特に福祉行政面での改善もさることながら、国際的な観点から見ると、アフリカ等を含めた途上国の窮乏状態を思い起こし、先進経済大国の私達が飽満な生活をもう少し節約し、これら途上国の国民が自立的にもう少し豊かな生活をするよう、我々一人一人がJICA方式に則り協力することも必要であると思った。

ウ. マレーシアがマレー人、中国人、インド人などの複合民族国家でありながら、それぞれ独自の文化、伝統、習慣を守り、相互にそれらを尊重し、認め合って平和に暮らしている点では国際性においては日本より進歩していることや、予想外に治安状態が良く、クアラルンプールは先進国の大都市に劣らず発達していること等に感心したり、反面『AWAS』と書かれた注意板が道路の到るところ500mおきぐらいに立てられているのが、無許可で、けしやコカを栽培したり、麻薬を扱えば『死刑』であることを警告していることを聞かされ驚いたものであった。

市内では高層のビルがドーム形の回教寺院や王宮と並び立ち、異国情緒たっぷりの雰囲気であり、バスで郊外に出ると、道の両側にびっしりとパームオイル、椰子、ゴムの木等

が、澄み切った夏の青空のもとに林立する熱帯特有の素晴らしい景色に見とれ、時々休憩したガソリンスタンドでは、楽しく現地の人たちと話したり、硬貨の交換等をした情景や、全行程をいつも笑顔で精力的にガイドしてくれたマズラン君の姿が今でも生き生きと思い出され、このような貴重な機会を与えていただいた国際協力事業団（JICA）関係の方々に心から感謝いたしております。

氏 名 井 上 喜久造
所属学校 大阪府立東豊中高校
担当教科 英語

研修の機会を与えて頂きありがとうございました。中川様、瀬合様には本当にお世話になりました。現地にあつては、事務所長様を始め皆様にご好意を賜りました。感謝いたしております。研修の報告に付きましては、私共の研究会誌「大阪の国際教育」にも書かせて頂く予定ですが、今は取り敢えず貴事業団に、気付きました事のいくつかを述べさせていただきます。素人の印象ですが、何らかの参考になりますれば望外の幸せです。

マレーシア事務所の取扱われる仕事量と、人数の少なさに驚きました。事業団自体も、事業規模が10倍になりながら、定員数は、15年前と全く同じと言う事の様子ですが、これでは、仕事は機械的となり、親身になった世話は出来ないでしょう。援助には愛情と配慮が必要の筈で金持ち風を吹かし金をばらまく事ではないでしょう。是非増員を計って援助の専門家を育てて頂きたいものです。

マラヤ大学日本語研究センターで、マレーシアの若者の中で選ばれた人達が日本語を学び、留学に備え勉強してくれるという事は嬉しい事です。日本で学びながらも、帰国した時に、さほど職業に恵まれていないとの事です。さらに次の若者に夢を与えるためにも、帰国者の就職にも力を注いでやって頂きたいものです。このセンターは、建物は事業団、運営は交流基金と文部省からの派遣教員との事です。役所の縄張り意識がこんなところまでと、すこしあされた思いです。事業団で仕切って人の派遣まで出来ないのでしょうか。

イポーでの夕食の席で初めて協力隊員とお会いできました。日本語を教えられるとの事でしたが学校が休みとかで現場を訪ねる事が出来なかったのは残念です。

テロインタンのスプランペラ稲作プロジェクトの事務所では三人の協力隊員から話が聞けました。年齢が若過ぎる故か、現場指導者の助手（アドバイザー）といった肩書きのためか、労働者が素直に指示に従わないとの苦労話がありましたが、既に単位面積当りの米の収穫を二倍近くにまで増したとの実績や、農薬を減らした稲作などを考えておられるとの話など、頼もしいと思われた事でした。

気になった事が二つありました。最近では協力隊人気が強くなり、何としても合格したいため大卒後改めて農業大学に入り直されて合格されたとの事です。失礼ながら専門家として大丈夫なのかなという点の一つ。二つ目は、このようなマレーシアの国家的プロジェクトには、隊員ではなく専門家派遣という形で援助がなされるべきではないかという事です。

アセアン家禽病研究訓練センターは見事な建物と設備です。向井様がおられる事もあり全体がよく機能しているようです。研究の成果が具現化され、鶏の飼育業者が恩恵を受ける事の大なるを願うものです。ただ、このセンターはマレーシアの国威昂揚には寄与しても、アセアンの訓練センターとしてはまだしの感と見受けました。結局は国毎に造ってあげねばならないのでしょうか。

相模インダストリーの牛尼様には感銘を受けました。十数年在馬され、日マ友好協会の仕事もされ、生産に関しては最新の高品質の製品を造られておいでのようです。しかも会社内では出来るだけ権限を現地の人に譲ってのようで、合併会社の理想的な形をつくられているように思われました。秋の季節が訪れる事のないこの国で本当によく頑張っておいでです。これ位の根気のある方がいないと援助も駄目なのだなあと痛感した次第です。国際人とは牛尼様のような方を指すのでしょうか。

C I A S T に完成された援助の姿を見ました。来年三月に協力が終了し、技術移転も問題ないとの事です。しかしマレーシア人の入学者が意外と少ないとの事です。又引渡した後各種機械のメンテナンスはどうなるのだろうと余計な事が気になりました。相模インダストリーの牛尼様のように、長く見守ってあげる人が必要なのではないでしょうか。日本の援助の息の短かさが気になります。イギリス人が設立したとかの林産研究所がどのように根付いたのか、西ドイツのG T Z はどのように運営されているのか、我が国はこれら援助先進国にまだまだ学ぶべきものがあるのではないのでしょうか。又加えて、援助を上手に広報するやり方も是非学び取って欲しいと思います。

クアラルンプール日本人学校は各教室の防犯用の鉄格子を除けば日本の学校そのものでした。塾も進出しており、在馬日本人は同じマンションに群れて住んでいるとか。中国人も同じく多くの中国人学校を持っているようです。日本には帰国後の受験という特別の背景があるにしても、中国人も日本人もマレーシア人と交流する気持は無いように見受けられました。それとも子供や、家族の安全のために日本人は固まらねばならないのでしょうか。

最後に述べさせていただきます。個人間であっても人を助ける程難しい事はありません。傲慢にならず、相手をスポイルする事もなくこちらの好意を役立ててもらおう。至難の業です。又相手は我々と考え方、生き方を異にする人達です。我々の考え方を強要してはならず、相手の主張に流されてもなりません。そのむづかしい立場にあつて、日々責務を果されている事業団の方々のお仕事の有り様を見せて頂きました。ご苦労様です。益々のご活躍を祈ります。生徒達に日本が責務として援助しなくてはならない事の意味を伝えたいと思います。この度は本当にありがとうございました。

氏名 浦木 勇
所属学校 鳥取県立境高等学校
担当教科 理科

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) マレーシアの普通の人々の生活と日本（企業・協力など）とのかかわり。
- (2) 熱帯雨林の破壊など環境破壊の問題とその対策

2. 国際協力の現場で参考になったこと、気になったこと

- (1) 林産研究所で熱帯雨林の研究がなされ、森林伐採の後はきちんと植林がなされているということ。実際我々の回った範囲では、森林伐採の後土壌が崩壊しているという現場はなかった（ただ、空や車窓から見たスズの採掘場跡が今後問題になりそうな気がするが）。そして日本のマスコミの「熱帯雨林の破壊」や「ODAの無駄使い」という報道がいかに独断的、一方的かということがよくわかった。
- (2) 協力隊員の方々が、より早く理解しあえるようにと「鼻髭」をたくわえて現場に入り、現地の人と非常にいい関係を保ち献身的に協力作業や事業をしているすがた。国際理解というのは結局は「人」を理解することだと思う。人を理解することによって、その国のニーズが見え、効果的な援助もできるのではないかと思う。
- (3) 今回の研修では、我々の接したマレー人はほとんどがマレーシアの指導的立場にある人ばかりで、この国の民衆の意識というのが肌で感じ取れなかった。稲作プロジェクトの現場で、入植者が少なく空き家になっている所や農民の意識を聞くと、指導者レベルと農民との間にかなり意識のズレがあるという。さらには、冬のないマレーシアでは「キリギリスは夏遊んでいても生きていける」という話に象徴されるように、人々は貧しくても心豊かに暮らしていけるのに、日本等の先進国から物質文明を押しつけられ、結局は物質的には豊かだが心貧しいという日本の問題点、更には、農業や産業廃棄物による公害まで押しつける結果になりはしないかと気になった。

3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

国際協力というとアフリカの飢餓地帯で、食料の増産に関することが象徴的に報道され、多くの人にとってはそれが国際協力のイメージとして定着していると思う。

そんな中で、家禽病研究訓練センター・林産研究所や上級技能訓練など研究者レベルあるいは指導者レベルを対象に協力・援助がなされていること。そして、設備機材ばかりでなく、JICAの標語にもなっている「人づくり」に重点が置かれている点は、この国に技術を根付かせるうえでも経済発展するうえでも最も効果的であり、もっとPRすべきと思われる。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

最近、若者が保守化しつつあると言われている。最近の本校生徒の進路を見ると、就職希望者（2割程度）は県内志向が強く、進学希望者も上級学校卒業後は鳥取県に帰るという志向が極めて強いようである。そして、「今が楽しければ、それが一番いいことだ」という発想が感じられてならない。

一方、今回マレーシアを駆け抜けただけでも、自分自身の想像をはるかに越えるほど、人や物が世界中を駆け巡っていることが実感できた。考えてみれば、今や我々の食卓一つを眺めても、エビは東南アジアのマングローブの中から取れたもの、イカはマグダスカル産、トマトケチャップはポルトガルや台湾、バターはオーストラリアやニュージーランド、さらに割り箸も東南アジアからきている。いわば、我々の食卓は世界中の人々の協力で飾られている。いまや、「自分さえ楽しければよい」などの発想では国は成り立たないことを認識させなくてはならない。「我々日本人は世界という市民の一人」という発想を、さらには、日本が世界の中で果たさなければならない役割（我々が享受している平和や富を世界に再配分しなければならないこと）を指導しなければならないと痛感した。

これを、物質文明からはるかに離れた辺境の地でも、献身的に取り組んでいる協力隊員の生きざまを語ることによって伝えたい。JICAの冊子「国際協力」をもどンドン活用したい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

地方の高校は年々始業式が早まっているので、もう少し早い時期に出発するのがよい。期間はもう少し長くてもよいと思う。

(2) 研修日程および訪問先

訪問先はバラエティーに富んでおり各々興味深いものばかりであった。一流ホテルに一流レストランも確かにありがたいことであったが、もっと農業従事者など普通の階層の人々との交歓や生活を知る機会が欲しかった。1日位現地の人の家にホームステイすることがあって

よいと思う。

日程について少しきつく、もう少し余裕が欲しかった。

(3) その他全般的な所見

初めての東南アジア旅行であり、見る物聞く物すべてが興味深いものばかりであった。そして、日本を考えることは世界を考えていかなければならないということが本当に実感できた。国際理解教育の重要性を改めて自覚させられた次第である。

今後、国際理解教育や国際協力の啓発事業の協力などに、微力ではあるが、全力を尽くす所存である。

この様な機会を与えていただいた県国際教育研究会および国際協力事業団に対して改めて感謝申し上げます。

氏 名 橋 本 英 治

所属学校 広島県立西条農業高等学校

担当教科 理科

日本ほど国際化の遅れている国はないと言われる。海外に旅行する人は年々増え続け、あらゆる国に日本人旅行者がいるほどであるが、その国とその国の人々を理解して帰る人は少ない。また多くの国から留学生や技術研修員がやってくるが、日本の社会は国際化を叫んでる反面、今なお閉鎖的で、淋しい思いをしながら暮らしていると、たびたび耳にする。

このような状況の中、我々教師は真の国際化の意味を見極め、自らの実践や体験をもとに生徒に対して国際教育をしていかねばならないと考える。

今回、平成元年度高校教師海外研修に参加し、マレーシアを肌で感じ、また国際協力の現場を視察できたことは、自らの経験や体験を深める意味において有意義なものになった。今後これを機会に、真に国際的感覚を持ち、国際協力に前向きな生徒を育てていきたいと考えている。

研修中、JICAならびに視察先の職員の方々に、いろいろとお世話になったことを、この場をかりて感謝します。

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

- (1) JICAの無償資金協力・プロジェクト方式の技術協力・青年海外協力隊などの国際協力についての実態をもとに、援助の意義を確認し、有効かつ継続性のある援助とは何かを知る。
- (2) 本校で今年度から実施している、国際交流農業実習（今年度はタイ王国）の次年度候補地の一つとして、マレーシアを考えている。そのため治安面、ホームステイ先、見学場所などについてその実態を知る。
- (3) マレーシアの国と人々について、生徒に伝えられるように、表面的にマレーシアをみるだけでなく人々の生活や国の直面する問題、自然環境等について知る。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

マレーシアに対するJICAベース技術協力実績は、1953～87年累計で、343.9億円、援助供与国中の第4位である。さまざまな事業を行っているが、その中で目を引いたのが、アセアン家禽病訓練センター（APDRTC）と、職業訓練指導員・上級技能訓練センター（CIAST）のプロジェクトであった。

援助をする際の課題として、よく耳にするのが、プロジェクトや資金協力をしている最中は良いが、いざ施設ができプロジェクトが終わってしまうと、施設の運営が相手国の経費面から難しく、また技術面でも現地人スタッフが仕事を引き継ぐには、十分なレベルに達していないなどの点である。しかしこの2つのセンターにおいては、プロジェクトの期間中であっても、日本人スタッフよりも現地人スタッフに、実働部分（実際の指導）を任せており、日本人スタッフはアドバイザー役に徹しているところが興味深かった。これだと、プロジェクト終了後もスムーズな運営を任せられると思う。

(2) 気になったこと

マラヤ大学日本語研究センターは、日本に留学させる学生の日本語事前教育センターに実際はなっているわけだが、説明を聞く限りでは、マレーシアに対し何を協力しているのかよくわからない。入学基準、日本に留学後のアフターケア、帰国留学生の受入れ体制など、何も問題を解決しようとなしお役所的な姿勢がうかがわれる。日本人スタッフの問題意識が欠けているのではないか。JICAは無償資金協力として施設面のみの援助しか行っていないが、協力隊をここに送り込んで活性化をはかってもよいのではなかろうか。

テロインタンで3人の協力隊員の活動現場を見学した。苦勞しているようだ。私も元協力隊員として彼らの気持ちは良く分かる。言葉の障壁、現地人の仕事に対する意欲の欠如、また自分自身の勉強・経験不足などによって、思うように仕事が進まない。隊員ならば誰もが経験することであろうが、そこから何かを始めないと、本当の協力活動にはならないと思う。3名の後輩たちに心から声援を送りたい。

林産研究所(FRIM)で研究協力をされている専門家の方の説明で、マレーシアがいかに森林を大切にしているか(たとえば、ラワンなどの伐採のためまわりの木を切ることはない。切る場合も、オイルパームなどを植林する。)がわかったが、それは半島マレーシアの事情だけであって、実際にはサバ、サラワク州から大量の木材が日本に輸入され、自然破壊が進んでいることはまぎれもない事実である。それを管轄外だからといって正確な情報を把握せず、ふたをするような説明では日本の専門家として情けないと思う。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

前述したように、アセアン家禽病研究訓練センター(APDRTC)と職業訓練指導員・上級技能訓練センター(CIAST)は、後継者育成、現地人スタッフの効果的登用の意味において成

功している例であり特に注目に値する。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回の海外研修については、直接的には本年度2月ごろ行われる。広島県高国協の研修会において報告会を行う予定である。また日々の授業の中で、研修中の体験や知りえたことを効果的に生徒に伝えていこうと考えている。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

研修を終えるとすぐ2学期が開始するというあわただしさがあるにせよ、JICAや各機関・各方面の都合が再優先するものであるからやむを得ない。

(2) 研修日程および訪問先

JICAの海外援助の現場を視察するのが第1の目的であるから、今回の訪問先はどこも欠かせないものであったわけだが、もっとその国と人々を知るためのコースがあっても良かったと思う。たとえば、農村での生活を見る機会であるとか、現地の人たちと、マレーシアあるいは日本について話し合う機会であるとか、極端な言い方をすればホームステイがあっても良いと思う。

マレーシアを知るには期間が短かすぎるわけだが、表面的な知識だけでマレーシアを理解するのではなく、民衆の生活や声を聞いてマレーシアを理解する場があっても良いと思う。

氏 名 山 本 一 夫
所属学校 徳島県立三好農林高等学校
担当教科 農業（畜産）

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

マレーシアにおける熱帯雨林地帯の林業と稲作栽培における二期作の現状について。

2. 国際協力の現場で

参考になったこと

- (1) マレーシア国民の生活習慣と人間性
- (2) マレーシア人の労働に対する意欲
- (3) 専門家の熱心な指導と協力隊員の真摯で地道な努力

気になったこと

- (1) アセアン家禽病研究訓練センターでの病理学的研究は各国の研究機関との連携をもち施設、設備も私にとっては目を見張るものがあった。しかし畜産経営の中心ともなるべき飼育技術の研究はどのようにになっているのだろうか。（この研究所で開発されている伝染病や普通病のなかには飼育環境の改善により防止できうるものもあると考えられるからです。）
- (2) マレーシアのサラ、サラワク州における日本商社のラワン材の切りだし方と今後の対策はどのようにになっているのだろうか。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

(1) スプランペラ稲作プロジェクト

発展途上国においてはその多くが食糧不足に悩まされている。これは、食糧生産があまりにも自然まかせの農業と考えられている点が多いため、気候、風土をうまく利用した農業経営の実践方法についての紹介は意義深いものとする。

(2) 森林研究所

日本人の消費する建築材やパルプの原料となるラワンをはじめ熱帯雨林に自生する巨木の切りだしについては、わが国の多くの国民が森林破壊の見地から強い関心を持っている。従っ

て現在 JICA が推進している森林保護の現状を強力に紹介されたい。

(3) CIAS T

我々日本人にとって飢えにくるしむ発展途上国のカラー写真の劇写は非常に強烈な印象を与えられる。しかし、食糧問題がほぼ解決した国々には、各種工業関係技術者の養成の現状を紹介することは意義深い。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

- (1) 今後行われる徳島県高等学校国際教育の会合には積極的に参加し、この研修で得た知識を多くの若者に紹介したい。
- (2) この研修期間に収集した資料を本校職員に配布し、それぞれの専門的分野で活用し生徒の知識を深めたい。

〔例〕 熱帯雨林地帯における稲作（農業）

ゴム、ココナツ、オイルパームのプランテーション

スズの採掘と加工（地理）

アセアン家禽病研究訓練センターのワクチン開発と伝染病について（畜産）

FORESTRY IN MALAYSIA（林業）

熱帯の果物と加工技術（食品製造）等

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

平成元年 8 月 24 日～31 日（8 日間）

(2) 研修日程および訪問先

別紙のとおりです。

(3) その他全般的な所感

私にとってこの研修は生まれてはじめての海外研修でした。

国際協力事業団関係の諸先生方の綿密な計画で一部のミスもなく有意義な研修ができましたこと心より深く感謝申し上げます。

今や国際化の波は日本列島を駆け巡り私たちの田舎ですら避けて通ることはできません。過疎化の進む我々の町においては農家の嫁不足が深刻な社会問題としてクローズアップされ国際結婚が現実のものとなっております。このような時期にこの研修に参加できたことは、今後における教育にあらたな波紋を起こす起爆剤になると確信しております。

私たちはテレビや新聞、雑誌などでいろいろな角度から断片的な知識が頭の中に入ります。しかし百聞は一見に如かずの『ことわざ』のごとく実際の姿を自分の目で確認できたことは本当に有意義なものでした。

ただすこし心に残ることとして、JICAのいろいろな協力や援助により運営されている諸機関で組織のトップの人々からの説明はあったものの、その地域で実際に恩恵をうけている現地の人々と情報交換の機会がもてたならばなお一層の研修効果があがったのではないかと考えます。

氏名 中嶋貞夫
所属学校 高松第一高等学校
担当教科 英語

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) 我国のマレーシアに対する援助の実態を知ること。

ア. JICAがこの国に建設した施設について

イ. 青年海外協力隊員と専門家の活躍

(2) 現地人の日本に対する感情を知ること

(3) マレーシアの教育、社会、経済、政治情勢を知ること

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア. 技術協力、資金援助が国際協力事業団を通して、種々の分野についてなされ、マレーシアの学術研究、産業の振興に活用されていること。

イ. 資金援助のみでなく、マレーシアの各分野で自立が出来るよう、人造りの援助がなされていること。

ウ. 対日感情が予想以上に良かった。日本軍が現地人を殺害したことについて、我々がお世話になったバスの運転手のアリー氏(51才)にたずねると、マレー人は日本軍に反抗しなかったので殺害されなかった。しかし中国人は反抗したので殺されたと言った。又、他の年輩のマレー人は日本が英国の植民地であったマレーシアを解放してくれたとも言った。又日本の経済援助に感謝していると言った人もいた。中国人の年輩者に対日感情について聞きたかったが、その機会がなかったのが残念であった。又幾人かの年輩者達が日本の軍歌をまだ覚えていて歌ってくれたのに強烈な印象をうけた。

エ. アセアン家禽病研究訓練センターのハイテクの粋を集めた立派な研究施設

(2) 気になったこと

ア. 協力隊員の任期が2年というのは短か過ぎると感じられた。3年以上でなければ十分な成果が上げられないのでは。又会社を退職して来ている隊員は帰国後の就職に不安を持

っていること。帰国後の受皿がないことが憂慮される。

- イ. マラヤ大学日本語研究センターで、日本の大学に留学希望の青年が2ヶ年間日本語を学ぶが、最初の1年間で基礎を、次の1年間で日本の大学で学ぶレベルのことを学ぶようであるが、日本の大学に留学してもついて行けず、落伍者が出ると聞いた。2ヶ年で日本語をマスターするのは無理である。せめて3年位は必要でないだろうか。このセンターには入るのも、ものすごい競争率を突破しなければならないと聞いた。何かしら成果が上っていない印象を受けた。
- ウ. プロジェクトの実施期間が終って日本人専門家が引き上げた後の施設機能が十分果せるかどうかの点、アセアン家禽病研究訓練センターでも、マレーシア人の研究員が意外と少なかったので不安を感じた。
- エ. クアラルンプール市内の交通事情が極めて悪かった。交通信号、横断歩道が極めて少なく、横断が危険であった。交通整備のプロジェクトが必要である。
- オ. 協力隊員専門家達は情熱を燃やして各分野で指導されているが、仕事、研究に対する現地の人の熱意、意気込みが不足しているようであり、その意識改革と人材育成にはかなりの労力と時間を費やす必要があるように思われた。

3. 我が国の協力ぶりを各方面で紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

- (1) マラヤ大学日本語研究センター
- (2) アセアン家禽病研究訓練センター
- (3) スランペラ稲作プロジェクト

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

現在JICAとはどんなもので、又何をしているかを知っている人は少ないと思う。私は先ず、本校で、できる限り多くの機会を利用して生徒に話をし、又本校には職員研修が年間に何度か行われているが、少くとも1度はその研修を国際教育に当てて貰って話したい。すでにその了解は学校長から得ている。

又、私は香川県の国際教育部会の事務局長であるので、来年の総会の折には是非報告し、国際理解、国際協力について啓蒙していきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

充実した8日間であり、理想的な期間であったと思います。マレーシア料理、中華料理が余り口に合わず、日本食が恋しくなった頃でもありました。

又時期は7月下旬もしくは8月上旬がよいと思います。帰国後翌日が始業式であり、典型的な進学校である本校では始業式の後に大学進学のための模試を行う程度受験勉強に力を入れている。私のような英語教師は、学期始めから多忙を極めている。その上この16、17日が学園祭で、私は指導教師の1人で多忙さは殺人的である。仕事を家まで持ち帰り深夜までやる始末である。この間に研修報告を書くのは大変で、十分意を尽くせなかったのが残念です。

(2) 研修日程及び訪問先

余り過密スケジュールでなく比較的余裕が持て、観光も楽しめて良かった。欲を言えば協力隊員ともう少し長く話し合える機会があれば良かったと思う。又、現地人の家、特に国道沿の椰子やバナナの林の中に点在する昔ながらの質素な家を訪問して、家の中を見せてもらったり住民と話をしたかった。つまり本当のマレーシアの素顔を見たかった。

(3) その他全般的な所感

大変貴重な体験をさせていただき本当にうれしく思っています。特に旅行中付き添っていただいたJICAの中川さん、瀬合さん、現地のマズランさん、バスの運転手のアリーさんに深く感謝します。現地でのJICAの皆さんも我々を暖かくお持て成し下さり、本当に気持ちのよい有意義な旅行となりました。又、日本各地の先生方とも友達となり、全く異質の高校、教育を知ることができ、この旅行の大収穫の一つとなったことは誠に意義深いことでありました。

最後に私は英語の教師でありますので、英語がある程度聞け、話すことができたので絶対的に有利でした。英語の必要性を痛感しました。生徒にも英語の重要性を強調します。又英語科以外の先生方もこれを機会に英語会話のテープを聞かれて学習され、次の海外研修の時には更に充実した成果をあげられますよう祈り上げて筆を置きます。

氏名 岡本 美喜男

所属学校 高知県立高知南高等学校

担当教科 教頭

近年ODAに対する国民の関心が高まる中で、マレーシアにおけるJICAの業務と現地での活躍ぶりに接して大変感動した。今回の海外研修を振り返って所感を整理してみたい。

- (1) 1970年新経済政策「貧困の根絶と人種間の経済格差是正」を目標に「ブミトラ政策」いわゆるマレー人優先政策をスタートさせる一方「ルック・イース政策」を遂行し、輸出志向型の工業化を目ざし、外国企業誘致にも積極的な取組みがみられ日系企業も400社を教えるといわれている。ゴム・すず・木材などの天然資源に恵まれた、多民族国家で資源や技術の開発等の国家的プロジェクトにJICAに限られた職員でもって、開発調査、専門家・協力隊の派遣による技術協力、研究施設など広範囲にわたる国造り、人造りの事業の推進と活躍に接し、認識を新たにしました。
- (2) マラヤ大学日本語研究センターにおける日本語教育の真摯な取組み、アセアン家禽病研究訓練センター（APDRTC）、職業訓練指導員・上級技能者訓練センター（CIAST）への施設、機材の供与やそれぞれの研究分野、技術指導に対する職員の熱心な指導、研修生の真剣なまなざしに接し感動した。
- (3) 最近「緑の地球」の保全にかかわり、開発途上国での熱帯雨林の破壊問題で日本の責任が問われているなかで、第一次産業省森林研究所では、半島マレーシアの森林資源の保全、木材の有効利用等々林業の発展に献身的な技術援助がなされており、事業の継続発展を期待したい。
- (4) スランベラ稲作プロジェクトや日本語の指導に携わっている協力隊員が、異文化のなかにおいて現地にとけこみ、それぞれの分野においてマレーシアの国造り、人造りの担い手としての人材育成のため使命感にあふれた活躍に限りない情熱を感じた。
- (5) 国家的プロジェクトへの援助、協力にもかかわらず、マレーシアの財政上の問題で供与された施設、機材を充分作動していないと指摘されている。自助努力を支援している専門家、協力隊員の引き揚げたあとが心配だとも話されていた。帰国後の協力隊員も含めたアフターケアの必要性を痛感した。
- (6) マレー人・中国人・インド人の多民族で構成されるマレーシアでは、異なった人種・宗教・言語

をお互いに受け入れて共存し、これからさらに発展しようとするバイタリティーに学ぶべきものがある。

- (7) 街角でみかけた少年たちに共通していたのは、明るく澄んだ瞳が、実に生き生きとしていて、とても印象的であった。21世紀には、日本の少年たちも彼らと手をたずさえて、ともに生きていくのだと思うと感慨ひとしおのものがある。
- (8) 資源もなく国土もせまい日本が、戦後40年にして経済大国となり世界を相手に発展への手助けをするようになった。ODAの事業も日本の国際責任において拡大してきた。その援助は目覚ましい量的成長を達成したが、これからは質の向上を計る必要があると指摘されている。これから日本に求められる援助姿勢として、各省庁思い思いの取組みの実施ではなく、強力な責任体制の下に行われる必要を感じた。ODAを意味あらせるためにも、JICAの一層の取組みに期待したい。
- (9) アジアの人々は日本に対して「戦前は軍人、今はビジネスマンかツーリストばかり」といっている。これからの国際理解教育は正しい日本を理解してもらうために、本当の友人としてアジアはもとより国際社会で活躍できる人材の育成がいそがれる。
- (10) 8日間寝食を共にした班員、現地の方々と交流・交歓ができたことは、貴重な体験であったし、この研修の大きな成果であった。研修の機会を与えてくれたJICA並びに瀬合義之・中川寛章の両氏に対し心から感謝するとともに、今後こうした派遣事業がさらに発展することを願うものである。

追記

- マレーシア班では、これからも国際理解教育の推進にむけて、班員相互の研修と親睦を深めJICAとも一層の連携をもつことになりました。JICAのご指導とご援助をお願い致します。
- 帰校後L・Hを利用してJICAの事業の目的、内容等をマレーシアの研修を通して講話を実施中ですが、他地域の関係資料が皆無ですのでお送り下さい。

氏名 山本浩一
所属学校 大分県立山香農業高等学校
担当教科 社会科

はじめに

今回、全国高等学校国際教育研究協議会の推薦をうけて、「海外研修マレーシア派遣」の一員に選ばれ、平成元年8月21日より8月31日までの8日間、全国の14名の高校教員と研修旅行を行ってきました。

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

マレーシアの産業、社会、教育事情をこの目でみたいと思った。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

青年海外協力隊員と懇談ができ、生の声を聞くことができたし、彼らも日本人に色々なことを話して嬉しかったのではないかと思う。いいかげんな気持ちではやってゆけないとも思った。

(2) 気になったこと

稲作プロジェクトの比嘉さんのはなしで“マレーシア人は働かない”という言葉、“中国系の人は良く働くんですよ”という言葉。町をみると、個人企業みたいに行っているのは中国系の人々が殆どだったし、町で掃除をしているのはインド系の人々だった。旅行中、農作業をしている風景は殆ど見ることはできなかった。一昨年、中国を旅行したとき、夜遅くまで働く農民の姿はいまでも脳裏から離れていない。そこそこにやって食べるものにこと欠かないマレーシアよりも他国に多く援助すべきではないかと思った。来年度から、外務省は経済協力に見合う派遣員の確保を実施（1989年9月1日付朝日新聞）するらしい。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

アセアン家禽病研究訓練センター（APDRTC）や林産研究所（FRIM）や職業訓練指導員・上級技能訓練センター（CIAST）等どれをとってもPR不足だと思う。（私だけが知らな

いのか) 高校生や中学生の色々な大会に便乗して資料等配布したり、説明をしたら良いと思う。
例えば全国高等学校国際教育研究大会は、毎年夏に開かれており、これを大いに利用すべきではないか。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

旅行の足跡をスライドを通して生徒や教職員に紹介したいと思っている。
以下その内容を紹介します。

8月24日 木曜日 晴れ

クアラルンプール市内

上空よりみると、赤くめくれた土(酸性土?)。

空港に降り立っての第一印象、気温34度、湿度80%、蒸し暑い。

税関はフリーパス(日本の経済援助が多いので外交特権みたいなものらしい)。

この町はマレー半島南西部クラン川とゴンバク川との合流点に位置するマレーシアの首都。
人口93万人、町の中心は2つの川の合流点より東。ここでは近代的なビルが立ち並んでいる(60階建てもある。地震の心配はない)。北部はマレー人の居住地。南方のペタリン街
一帯が商店がたてこむ中華街。インド人の居住区は東部のヒンズー教寺院を中心とする一
帯で、西方丘陵の緑の木立に見え隠れするのが旧イギリス人の豪邸。

この町は1857年にクラン川をのぼってきた中国人の錫の採掘者が住み着いたのがはじまり。
1880年以降急速な発展をみせ、1985年マレー連邦の首都となる。20世紀に入ってゴムやス

ズに対する近代産業の需要に答えて大都市に成長。

公用語はマレー語、しかし、イギリス植民地が長かったため英語が通用する。中華街は中
国語と膚の色といい、言葉といい国際色豊かである。宗教はイスラム教を国教としている。

通貨

マレーシアドル 1ドル=56円(1989年8月24日)

紙幣は500ドル、100ドル、50ドル、10ドル、5ドル、1ドルの6種類。硬貨は5ドル、1
ドル、50セント、20セント、10セント、5セント、1セントの7種類。

バスとマズラン氏

これから8日間の国内旅行のバスが待っている。ドイツ製のディーゼルエンジン（東京のリムジンバスに似ているが、スピードはでなくてエンジンの音は高い）通訳はマズラン氏。彼は25才、日本の新宿で日本語学校に通って勉強をしたらしい。その後、現地の松下電気に就職、昨年より旅行会社に就職し、ガイドで頑張っている。

ホテル

ホテルはフェデラルホテル、1202号室。ツイン部屋を1人で使う。バス、トイレ、テレビ、冷蔵庫、ソファ、机、洋服かけ等が備え付けられている。値段は125ドル。風呂に入る。石鹸、シャンプー、バスタオル、シャワーもあり日本と変わらない。トイレトペーパーやティッシュペーパーはあるが、スリッパはない。ホテル内は冷房がききすぎて寒いくらい。（22°C、68%）

国際電話

ホテル等から直接、簡単にかけられる。日本にかけるとき①ホテルの外線番号→②007(国際電話識別番号)→③81(日本国番号)→④日本の市外局番(最初の0不要)→⑤相手の電話番号の全部で14桁。料金の3分間の基本料金14.2マレイシアドル、その後は1分間4.5マレイシアドルである。

中華料理

円卓を囲む。味は日本と同じ。うまい。アンカービール（マレイシア産）とラオチューを飲む。1人前23ドル（料理9ドル、ビール等14ドル）。イスラム教の国は禁酒国か。酒類がやけに高い。

町の散策 プキットビンタン通り

この町は、日本の新宿や原宿を一緒にした町に似ている。とにかく人がおおく、道路横断は車が多くて渡るのが難しい。屋台が立ち並んでいる。果物を食べる。

◇ パイナップル …………… 2ドル、水っぱい、ポカリスエットに似ている。

- ◇ ドリアン 5ドル、独特の匂い。
- ◇ パパイヤ
- ◇ マンゴスチン 50セント
- ◇ ランプータン 1キロ2ドル、おいしくてたくさん食べれる。

刑務所

麻薬の取り締まりが厳しい。先日、オーストラリア青年が不法に持ち込み死刑執行。町のど真ん中に据えてみんなの目に触れるようにしているのが特徴。AWAS, DEATH.

王の家

この国は13州の連邦制立憲君主国。国王（サルタン）は、半島マレーシア9州の9人のスルタンの中から5年の任期で選出されるという世界でも珍しい王制である。現代は1989年4月就任したアズランシャー。国王の権限はイスラム教の最高責任者としてのほかは、かなり制限されており、政治は基本的には責任内閣制のもとで下院議会の多数党によって執行されている。

道路・交通事情

道路は広く3車線、日本製の中古車が目につく。国産車はSAGA（日本の三菱自動車と合弁会社、値段は120万円）。道路も広いが車も多いのでラッシュは一寸ずりの状態。根本的対策が望まれる。単車は専用道路の通行を義務づけられている。殆どの人がヘルメットを被っているのには驚いた。しかし、単車での事故は多いらしい。また、人口に対する交通事故の件数や死者の数も桁はずれに多いらしい。

8月25日 金曜日 雨のち晴れ

7時の景色

7時にホテルのモーニングコールをうける。窓の外を見るとまだ薄暗い。その理由は、日本の標準子午線は東経135度、クアラルンプールは東経102度、2時間以上の時差があるのが当たり前だが1時間しかないため。朝早くから働かせようとした日本のサマータイムを思い出す。

JICA日本事務所表敬訪問

所長の岡部さんより「マレーシアに対する政府開発援助及び技術協力」と「マレーシアにおけるJICAの諸事情」の説明を受ける。日本の援助額は世界第5位であり、政府から期待されている。

マラヤ大学日本留学特別コース

マハティール首相は、1981年7月以来、マレーシアの国造りのため、日本と韓国の経験に学びたいと「東方政策」を提唱し、その一環として日本の大学への留学生の派遣を決めた。本コースが始まったのは、1982年で、2年の課程で日本の大学教育を受けるために必要な日本語と、数学、物理等の教科を学習する。本コースの終了時に日本政府（文部省）による試験を実施し、成績優秀者がマレーシア政府派遣留学生として日本の大学に入学することになる。私の住んでいる大分大学は26名の留学生中マレーシアから13名在学しているのをみても力の入れようがわかる。本国より毎月10～16万円の給費を受けているらしい。

学生は、マレー系マレーシア人で、マレーシアで11年の教育を修了した者が受験するSPMという全国的な学力試験で優れた成績を修めた者の中からマレーシア政府が選抜する。定員は100人。理系は75人、工学部または理学部に進む。文系は25人で経営学を学ぶ。授業は50分、週41時間、8時より17時までハードスケジュール。日本語の読み、書く、聞く、話すのうち、大学で要求される資料や参考文献を読みこなす読解力と大学の講義を聞くための聴解力をつけることを重点に指導している。

問題点は、2年間に約900時間で大学教育を受けるために十分な日本語力をつけるという、非漢字圏の学生にとっては、かなりたかいものであり、さらに、学生が日本語に触れることができるのは教室という限られた場所のみであるため、日本での日本語教育と同じだけの効果をあげるのは難しいと、教頭の龍田先生（国際交流基金派遣）と化学の村田先生（文部省派遣）が説明して下さった。ちなみに、1期生39人の内容は、26人卒業、1名大学院進学、12名脱落、卒業生は日系企業に就職している人が多いらしい。

トイレ使用料10セント

昼食は日本人経営者の「ヤオハン」で中華料理を食べる。日本料理もあったが高い。ここ

は5階建てのマケット・デパートでエスカレーターや照明設備は良いのだが、トイレに行くには10セント支払わないと入れないし、紙もない。2階ではへび展をしていたので、見に行くと、係の青年がへびを出して写真を写してくれた。

コブラ、ニシキヘビ、アオヘビ等1200匹いた。入場料2.5ドル。

ゴム園

クアラルンプールからイポーへバスでの移動だが、窓の外はゴムの木ややし畑（パーム油の原料）がたくさん目につく。ゴムは、イギリス人が100年前ブラジルより種子を持ち込み、瞬く間に全国に広がった。世界の天然ゴムの45%産出、その量は世界第1位。日本でゴムの木と呼ばれるものとおおちがい。白樺の木ににている。特にゴム園の手入れは行き届いている。ゴムの原料は、樹木の皮を朝5時頃少し削いで樹液をためる。夕方集めて処理場へ出荷。原液の匂いは臭い（チーズの腐ったようなにおい）

ココナッツ園

ココナッツは3週間で製品になり実をもぐと、またすぐできる。飲料水の代用となる。コップや茶碗等にも早変わりする。味はポカリスエットみたいなうす味で喉が渇いたときはもってこいである。

木が高いので実をとるのは大変な仕事。猿を使って実を取ることは常識らしい。

専門家、青年海外協力隊員との夕食懇談会

19時20分より「民衆海鮮酒家有限公司」で中華料理を青年海外協力隊員と共に会食をする。出席者は、宮順子（日本語）、松尾武徳（溶接）、坂本佳三（電子機器）、宗広一美（理学療法士）、井上信一（建築製図）、牛尼相模ゴム所長さん。私のすぐ近くにいた宗広さんと話ができた。彼は、福岡県の出身、こちらで8ヶ月目を迎えている。交通事故等で神経を麻痺した人の家庭をまわって指導しているという。口髭をはやしているが、その理由を聞くと、親近感がわくとのこと。マレイシア人は殆どの人が髭を伸ばしているので“郷に入れば郷に従え”のことわざどおりか。また、毎日20時より22時までNHKラジオの短波放送を聞いているので、日本の状況も分かるらしい。高校野球で帝京高校が優勝したことや大相撲のことなども知っていた。これがホームシックを和らげてくれるらしい。ただ困ったことは、トイレの使用に悩まされたという。紙を使わず、左手を使って、水を使

いながら処理をしなければならない。共同便所で紙を使っていて現地人から睨まれたとのこと。よって、食事は、ナイフやフォークは使わずに右手でつまんで食べる。マレー料理は、日本の激辛と比べものにならないくらい辛いので困ったようだ。したがって食前と食後に手を洗っている。左手は不浄の手、握手するときは、間違っても左手は出してはいけない。

イポーの町

イポーの町は石灰岩の産地で洞窟も多い。個人の家々の2階の床は大理石の所が多いらしい。我々が泊まったマレーシアのホテルの床はすべて大理石だった。洞窟には、仏像を備えて仏教寺院となっていた。

8月26日 土曜日 晴れ

相模ゴム工業

1970年生産開始、74年増設。日本マレーシア合弁会社。

コンドームの生産、年間60万ダース、9割が輸出、輸出先はヨーロッパが主、生産は液状のゴム(30%)が遠心分離器で水分を抜く(60%)これを加工して製品を作る。厚さ30ミリミクロン、精度は残念ながら80%。

資本金200万ドル、従業員1名(日本人)+69人(現地人)=70名、平均賃金10ドル(初任給の日給月給)年休は年20日、無断欠勤3回でくび。日本人と比して、単純作業は変化なし。緊急事態への対応は弱い。

家禽病研究訓練センター・プロジェクト

期間：昭和61年(1986年)4月17日～平成3年4月16日(5年間)

背景：アセアン諸国では近年、安価な飼料供給と需要の伸びにより都市近郊を中心に家禽産業の規模が目覚ましく拡大したが、飼養管理のまずさ、伝染性疾病等の発生とそれに対する予防・治療等の不備により、相当の損失が生じている。このため、アセアン諸国共通の問題として、家禽病の研究・訓練に関し、我国へ要請越した。

内容：1. 家禽病(伝染性疾病、寄生虫病中心)の調査研究

ア. 診断・病理・疫学等の手法についての調査研究

イ. 研究を通じてのアセアン各国への資料の提供、試料の作成および供与

ウ. アセアン各国の家禽疾病の調査・診断等への技術協力

2. アセアン各国の研究者技術者を対象とする訓練

現状：無償資金協力によるアセアン家禽病研究訓練センターが1988年1月に完成、プロジェクト活動が本格的に進行中。また、同じく無償資金協力により同年7月にSPF（特定病原菌不在）鶏舎、実験鶏舎等が完成供与された。現在フルタイムの研究官が5名、実験助手が10名、獣医官補が2名、その他10名の計28名が配置されている。1988年より第三国研修が開始され、現在までセミナー2回、基礎診断コース1回が実施されている。

ペラトン

イポー市南6kmのところにある洞窟寺院。石灰岩の洞窟を利用した寺院。1950年頃完成。

クアラカンサー

ペラ州のサルタンの王宮イスタナ・インカンダリアがある。この王宮は壮大な大理石のドームをもち、堂々たる姿。特に、この王宮は儀式用の特別浴場をもっている。

ウブディアモスク

黄金色に輝くドームを3塔もっており、荘厳な美しさを感じさせる。今まで、写真等でモスクを見たことはあるが、実物はやはり迫力がある。アラベスク模様も大きくはっきり見える。

ペナン

マレー半島中部西岸に位置するバターワースの3km沖合に浮かぶ小島で、東西15km、南北24km、面積280km²（シンガポールの半分）。主都ジョウジタウンを中心に、かつて「東洋の真珠」と形容された美しい風光を生かし、垢抜けたシーサイドリゾートとして観光客を集めている。1786年イギリス東インド会社が極東貿易の基地建設。しかし、その後東西貿易路の中心が南に下がり、シンガポールにその繁栄をゆずって現在に至っている。

ペナン島へは東洋一長い13kmのペナン大橋をわたって行けばよい。昔は、すべて船のみで不便であった。海水はあまりきれいとはいえない。汚染されてきたのだろうか。

8月27日 日曜日 曇り後雨後晴れ

ペナンヒル

島の中央部にある標高810メートルの丘。3ドルだしてスイス製のケーブルカーに乗って30分で頂上に着く。途中、猿を数匹みつけた。山の中腹に住居がある。このケーブルカーは観光より生活に結び付いている感じがした。頂上は気温が5℃低く、29℃だった。しかし、霧と雲のため、あまり遠くまで見渡せなかった。頂上には、展望台や島の公園やヒンズー・イスラム寺院があった。

極楽寺

ペナンヒル南東麓にあるマレーシア最大の仏教寺院。1890年から20年かけて作られ、山の斜面に建っているため、迷路のよう。境内には仏像が12万體ある。のぼりつめた所にあるのが高さ30メートルの7層のバン・フッド・パコダ。このパコダは、下部が中国、中央部がタイ、上部がビルマ様式といわれている。これをアエルイタム寺院ともいう。

12時20分頃突然のスコールにみまわれる。あっというまに、道路は洪水のように水が溢れる。しかし、10分もすると雨はやむ。

植物園

ペナンヒルの北側にある総面積28万㎡と広大なもの。中央に滝があるため“滝の公園”とも野生サルが多いので“サルの公園”とも呼ばれている。熱帯のジャングルをそのまま残している。バスから降りると少年と思われる人がピーナツを買ってくれとしつこくつきまとう。ピーナツは食べたくないので無視して歩いていたが、猿の餌を買ってくれとのことので了解し、3袋1ドルで買う。その少年に年令を聞くと、なんと20才、もう一人は22才、インド系の貧しい少年たちをみてかわいそうな気になった。観光客相手にカタコトの日本語はうまい。

バツァー・フェリング

ペナンの北海岸は美しい白浜を持つビーチが点在するが、中でも最高のビーチリゾートがこのバツァーフェリング。ヤシの林を背景に白い砂浜が東西に延びて、高級ホテルが海岸線に沿って並んでいる。水泳やマリンスポーツや甲羅干しを楽しむバカンス客がこの浜

を賑わしているが、東洋系の人々は殆どみかけない。

ここで海水パンツを20ドルで買って泳いでみた。海水は温いが、水はそんなにきれいではない。砂はきめが荒く黄色。浅くはなく、すぐ深くなっているのがびっくりした。ヨーロッパ系の人々は浜辺のきれいなプールで泳ぐ人が多い。甲羅干しの人が多く、本を読んだり、ただじっとしている。時間に追われている我々日本人には考えられない光景。ここでは裸でないといずれい。三段腹をだしている人も気にならない。

ここでの珍光景を2つ紹介しよう。

その1つは“ニセモノのホンモノ”と称してスイス製のローレックスを20~60ドルの安さで売っている。曜日も日付もあり、本物のように金色に輝いているが、本当はニセモノですと称して売っている。

その2は、マッサージ・指圧をしないかと若い青年がやってきた。全身だと30ドル、足とか首とかの局部は5ドルからするとのこと。指圧の免許はあるのかと問うたら、この国ではそんなものは必要ないとのこと。いろんなニセ商売を考えつくものだと思った。日本では両方とも禁止されている。

コーンウォーリス砦

町の北東部にある要塞跡で、フェリーターミナルの北側にある。1786年にペナン島を発見したキャプテン・フランシス・ライトが上陸した地点に築かれたもの。砲口を海に向けた大砲は約380年前のオランダ製のもの。近くには英国風の建物が多数。この近くで学生達が足を使ったバレーボールみたいなものをやっていた。公園は芝生が綺麗だが、ここだけはゴミくずが散っていた。

雅 (ジャパニーズレストラン)

夕食は日本食を食べにいった。着物を着た日本語のできない美人のウェイトレス。ひざについて、マナーもよかった。天麩羅定食20ドル、(参考までに焼肉定食25ドル)。とにかく味は良かった。内容は刺身、吸い物、茶わん蒸し、漬物、ご飯、天麩羅はえび、れんこん、いも、ピーマン、玉ねぎ、にんじん等だった。コックは日本人の吉田さんという人だった。酒を飲もうとしたが85ドルと高いのでやめた。

トライショウ

人力の三輪車でいわゆる輪タク。乗る前に値段の交渉をしないと高く取られるので注意。自転車を漕ぐからか太っている人は見かけなかった。足の長いインド系の人が多い。

8月28日 月曜日 曇り後晴れ

ペラ州

ここはマレー系が殆ど。バナナやパイナップルが目につく。水田もある。農作業は殆どが機械とは驚いた。ブルドーザーはフォードやファーガソンが主。家の作りは高床式のトタン屋根。湿度が多いためか。蒔きでご飯等炊くらしい。

マレーシアの学校制度

学校教育は、1961年の教育法に基づき、小中等教育は無償であるが、義務教育ではない。学制は「6-3-2-2-3」。小学校6年、中等教育は7年間で、初等中学校3年（日本の中学校）、高等中学校2年（日本の高等学校）、そして大学予備課程2年から成る。大学は3～6年である。校舎や施設が小さいので学校は二部制を採用している。7:30～13:00までと13:30～18:00からの二本建。生徒が朝早くから夕方遅くまでいるなと思ったらその訳が分かった。上級学校へは資格試験にパスしないと進めない。教育用語はマレーシア語である。

FELCRA関係者との懇談会

中村浩（病虫害）、比嘉勇男（土壌肥料）、小西氏の3氏、テランス地域開発部長らとの話し合い。

政府がジャングルを切り開いて、農場を作った。この農場は日本の児島干拓地みたいな感じ。その理由は

(1) 農民の収入を増やすこと。(2)土地の有効利用。(3)雇用機会の増加。(4)農民に基本的、社会的潤いを与える。

稲の栽培方法は、直蒔き、種蒔きや刈り取りはすべて機械化。薬や肥料をやる時は人の手でやる。

2期作：10月に植えて2月取り入れる。4月に植えて7月に取り入れる。4500haを3ブロックに分け、種蒔きだけでも2ヶ月かかる。収穫量は3トン、5トンまでもっていきたい。堆肥は鶏糞、土壌は酸性度が強いので2トンの石灰と磷酸肥料50～100kg入れるとよい。

経営：マネージャー→20～30人の職員（1人当たり200～300エーカー）→農民を雇う。農民は給料で生活している。15年後に土地を払下げて貰う予定。農民は水田の仕事を嫌う。（暑いので）今年の入植者400世帯。平均賃金12～13ドル、労働時間8～12時までの4時間、後は家でゆっくりくつろいでいる。中国系の人はよく働く。

8月29日 火曜日 晴れ

林産研究所 (FRIM)

JICAの石原さんが説明してくれる。

期間：昭和60年4月1日～平成2年3月31日

背景：マレーシア政府は、第4次経済社会5ヶ年計画で森林資源の保全を図るため、特に木材の有効利用の推進を重点施策の一つとして掲げたが、研究体制が未整備であるため、我国に技術協力を要請した。日本の協力機関は、農林水産省林野庁森林総合研究所、大学、県林試。

内容：林産加工、および林産研究の分野について次の研究協力を行う。

- ①木材集成加工 ②木材抽出成分 ③木材分析 ④木質パネル製品 ⑤木材保存
- ⑥木材乾燥

問題点 ① 政府の方針が州の独自制を認め、北ボルネオは伐採が盛ん、西マレーシアは植林が盛んというふうがちぐはぐ。

メランテ（ラワン材）は1年に1センチメートルしか伸びなくて、直径1メートルの木材は100年かかる。下から上まで太さが同じで、上の方のみ枝があり、節がない。

- ② 大学卒が少ないため研究体制のリサーチオフィサーが少ない（マレーシアは500人中100人、筑波大学は700人中500人いる）

マレーシア職業訓練指導・上級技能者養成センター（CIAST）

1981年1月、鈴木善幸首相がASEAN諸国を歴訪して提唱された「ASEAN人造りへの協力」構想に応じて、マレーシア側が提案したのが、このCIASTである。マレーシアは1971年以来New Economic Policyのもとに経済の高成長を背景として貧困の根絶と社会の再編成の実現を目指しているが、それには技能労働者の養成が必要で、それを担う各種訓練施設の頂点にCIASTを位置づけるとしている。さらに、他のASEAN諸国からも受講生を受け入れる計画も進められている。

このASEANプロジェクトに対して我国は建物建設及び機械設備供与を無償資金協力（38億円）により実施し、JICAを通じて鋳造から機械、電子、さらに監督技法まで7科14部門の専門家の派遣と、マレーシア人指導員（カウンターパート）の日本研修を中心とする技術協力を行うなど、他方面にわたる協力を行っている。

現在の長期専門指導員は6名で、協力期間は1990年3月まで継続実施中である。

8月30日 水曜日 晴れ

クアラルンプール日本人学校

昭和41年設立。日本大使館付属のもの。現在の生徒数581名。学期毎に70名位の編入学希望者がある。両親のどちらか一方が日本人であれば入校できる。授業料は、月に220ドル、バス代金100ドルくらい。通学は23台の路線バス（小中）、5台（幼稚園）授業内容は国内と変わらず。生徒は塾に通っているものが多い。

教員の任期は3年。文部省よりの派遣教員22名、現地採用教員2名、現地英会話教員4名、合計28名。平均年齢37才。先生の交替がはげしいので継続性、接続性の問題がある。引き継ぎや教員の和が大事。住居は一戸建て。食事は日本食も豊富に食べられるので心配ない。国際交流としては、現地校訪問や現地校招待等をしている。

夏休みで、実際の授業風景が見られなかったが残念。教頭の上平先生と事務長の桑田先生が応対してくれた。

国家記念碑

レイクガーデンの北端にあり、独立戦争（1949年～61年）で戦死した兵士の記念碑になっている。正面の巨大なブロンズ像は、その台座に刻みこまれた言葉とともに、7人のマレーシア戦士の像となっているが、その姿はワシントンにある「硫黄島記念碑」に類似して

いる。噴水の池に囲まれており、夜はライトに浮かびあがる。

国立博物館

1963年に建てられた高床式民家を模した堂々たる建物。内部は4つに分れており、歴史、生物、芸術、民族、技術等の資料が展示されている。興味深いものは、先住民族のオラン・アスリーや各州のサルタンの衣装・風俗に関する資料。

建物正面入り口の左右にはイタリア製のタイルを使ったモザイクの巨大な壁画が配されている。左側にマレーシア各地の風俗が、右側には建国以来の歴史が描かれている。

クアラルンプール中央駅

1917年に完成したマレー鉄道の中心駅で、その華麗な建築で知られている。白亜の外観と尖塔をもち、イスラム様式をとり入れた姿は、とても駅には見えない。ここから南北にマレー鉄道がでており、南へはジョホール水道を経てシンガポールへ、北はバターワースを経てバンコクに至る国際急行列車の発着駅となっている。構内にはステーションホテル、観光案内所、売店、郵便局、床屋などがある。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

帰って翌日からの勤務はこたえる。旅行の整理やレポートも書かなければならないし、もう1週間早ければと思う。期間は良いと思う。

(2) 研修日程および訪問先

日程は計画的に練られていたので良かった。

(3) その他全般的な所感

ホテルはツインになっているし、経費面からと他高校の先生との交流ができることや、その日の旅行の整理等できるので2人ずつの方が良いのではないのでしょうか。

英語のみで説明した家禽センターやFELCRAやFRIMは同時通訳をつける配慮をして欲しかった。

JICA